京都市文化観光資源保護財団

会報

NO. 90 2005. 10. 15

もくじ

ー特集ー
京都の近代を飾った名建築家たち－2
「京都が育てた巨匠たち」
京都工芸繊維大学教授　中川　理 P 2

ー保護財団の活動ー　P 9

特集　京都の近代を飾った名建築家たちー２

京都が育てた巨匠たち

中　川　　理

□はじめに

明治維新の後，京都を産業都市として再興しようとしたいわゆる「京都策」は，成功したとは言いがたかった。少なくとも，近代工業は，京都の町には根付かなかった。しかし，岩倉具視らの主張が奏功し，京都は，御所を持つ第二の「みやこ」として位置づけられ，戦前までは「三都」の一つとして，東京，大阪に並ぶ都市の「格」を維持してきた。

そのため，西洋近代の建築物も，東京や大阪に負けない「格」を持った作品が数多く作られてきた。宮内省のいわば宮廷建築家である片山東熊が設計した京都国立博物館（旧帝室博物館・明治28年・重要文化財）や，明治・大正期の日本の建築界をリードした辰野金吾が手がけた京都文化博物館（旧日本銀行京都支店・明治39年・重要文化財）などの質の高さが，今でもそれを物語る。

しかし，京都は，東京や大阪が作り出せなかった，独自の建築の質も獲得している。それは，戦前において京都を拠点として活躍した建築家が実現したものだ。その代表格が三人いる。

□松室重光

一人目は松室重光（1873～1936）。彼こそ，京都の西洋近代建築に，まさに京都らしい風格を与えた最初の建築家と言えるだろう。

松室は，京都の出身である。松室家は，松尾大社の摂社・月読神社の神官の家柄だ。第三高等中学校を経て，東京帝国大学造家学科（後の建築学科）で学び，京都府の技師として、京都に戻ってくる。

上：京都ハリストス正教会聖堂（明治34年）〔写真１〕
下：同　聖堂　（表紙カラー掲載）

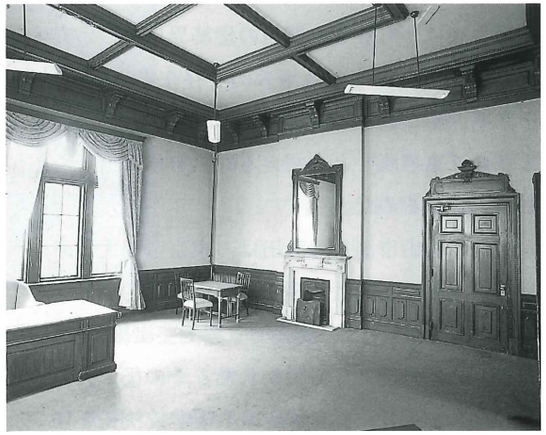
当時の東京帝国大学造家学科は，日本で唯一の建築に関する官立大学教育機関である。そこを卒業するのは，日本の建築界を担うエリート中のエリートであった。だから，建築に関するあらゆる仕事を担った。松室が京都に戻った時は，おりしも，明治30（1897）年に古社寺保存法（文化財保護法の前身）が公布された直後である。そこで，彼の最初の仕事は、古建築の修理となった。

しかし，もちろん，京都で誕生した初めての建築家となる松室には，しだいに近代建築の設計の仕事がまわってくる。その代表作となる二つの建築が，今でも残されている。

一つは，京都ハリストス正教会聖堂（明治34年・京都市指定有形文化財）〔写真１〕。御所の南に今でも異彩を放つビザンチン様式の教会堂だ。ロシアで作成されたというイコノスタス（聖障）が飾られる静謐な内部空間は圧巻である。もう一つは，京都府庁旧本館（明治37年・重要文化財）〔写真２〕。こちらは，ルネサンス様式の堂々たる庁舎だ。

二つの建物は，全く異なる様式の建物だ。京都府庁のルネサンス様式は，西洋建築として多様されるものだが，京都ハリストス正教会のビザンチン様式は珍しい。このようなわが国でも例の少ない様式でも，破綻なくまとめあげているところに，松室の技量の高さがうかがうことができるだろう。

もう一つ特筆すべき点は，二つの建物とも，その後のプロトタイプとなったことだ。京都ハリストス正教会は，ハリストス正教会が全国に建てていく聖堂の原型となった。今でも，豊橋聖堂（大正３年・愛知県文化財）や白河聖堂（大正４年・福島県白河市文化財）など，この京都聖堂にそっくりな教会が残されている。そして，京都府庁も，府県庁舎のモデルとなった。ロの字型の平面で背面に議事堂を配した構成は，確かに，京都府庁以降の府県庁舎建築でポピュラーなものとなっていった。



上：京都府庁旧本館（明治37年）〔写真２〕
下：同　旧知事室

このように，松室が手がけた建築は，きわめて高い質を持ち，「京都発」の建築として、全国的にも価値を持つものであったのだ。もし，このまま松室が京都で活躍し続ければ，間違い

なく，京都にあって日本を代表するような建築家になりえていたと思われる。

しかし，残念ながら，京都府庁完成時に部下の汚職事件が発覚し，松室は京都を去ることになる。その後，彼は満州にわたり，関東都督府技師として，数多くの公共建築を設計し活躍した。

□武田五一

もう一人は武田五一（1872～1938）だ。生没年でもわかるとおり，松室重光と全く同じ時代を生きた建築家だ。実際，東京帝国大学造家学科では，二人は同級生だった。しかし、武田は京都に来てから終生，関西の建築界にかかわり続け，そこに君臨するボス的な存在になった。そして，彼こそが，近代建築デザインの世界に，まさに「京都風」とも言える作風を作り出した張本人になるのだ。

広島県福山市出身の武田は，東京帝国大学卒業後に同大学助教授を経て，明治36（1903）年に京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）の図案科の教授として招かれた。その後，大正7（1918）年に，名古屋高等工業学校校長を任じられたが，すぐに大正9（1920）年に，京都帝国大学工学部に建築学科が誕生し，その初代教授として再び京都に戻った。こうした教育機関での指導を続けながら，一方で，関西を中心に，きわめて多くの建築設計をこなした。その数は，二百を超えるとも言われている。

武田は，京都高等工芸学校に招かれる前にイギリスに留学している。ちょうどその当時のヨーロッパは，アーツ・アンド・クラフト運動，アール・ヌーボー，セセッションなど近代主義

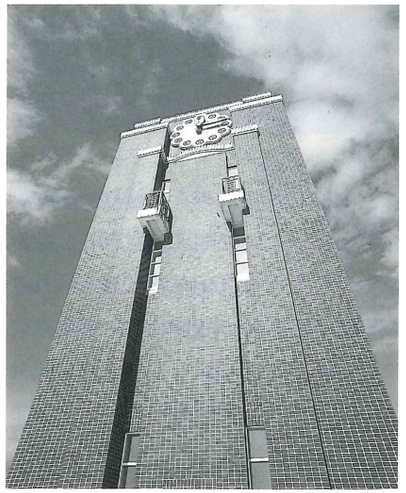
上：1928ビル（旧毎日新聞社京都支局・昭和3年）〔写真3〕
下：同　3階ホール

の建築に向けた新しいデザイン潮流が次々と生まれた時である。一般的には，武田は，それらの新しいデザインを日本に積極的に紹介した建築家として知られている。

確かに，彼の手がけた作品には，そうした新しいデザイン潮流を示す作品は多い。三条通りの1928ビル（旧毎日新聞社京都支局・昭和3年・京都市登録有形文化財）〔写真3〕や京都大学の営繕課とともに設計した時計台・京都大学本部本館（大正14年）〔写真4〕などには，セセッションやアール・デコの息吹を伝えている。

しかし，武田の建築家としての本質は，単なる紹介者では終わらなかったことだ。彼は，京都高等工芸学校では図案科の教授として，建築だけにとどまらない工芸全般の教育・指導を行っていた。実際，京都の近代陶芸の世界などにも彼のデザインは大きな影響力を持っていた。さらには，橋梁のデザインから噴水，はてはロゴマークのようなものまで，さまざまなものを武田はデザインした。彼は，生活に関わるあらゆるデザインに，近代へ向かう新しい潮流を吹き込み，より豊かな生活空間を作ることを目指していたのだ。常識的な建築家の枠にとどまらない，いわば「生活デザイナー」であったわけだ。

上：京都大学本部本館（大正14年）〔写真4〕
下：同　時計台

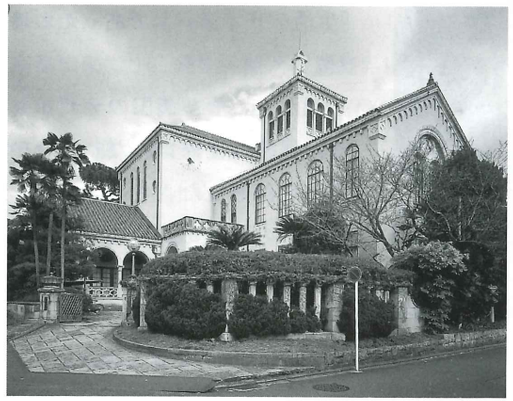


だからこそ，武田のデザインは，建築の洗練にこだわらない自由さがあった。さまざまなデザインの要素が躊躇なく混在する。それは，悪く言えばデザインに一貫性がないということになるのだろうが，その親しみのある表情は，今でもわれわれを魅了する。

武田のデザインの混在は，「和」と「洋」の要素が主役となる場合が多い。彼にとって「和」はとりわけ価値のあるものだった。松室と同じように，武田にとっても古社寺の修理は重要な仕事であり続けた。その中で，彼は伝統的な日本建築の持つ魅力を発見する。初期のころの代表作と言える順正・清水店（旧松風嘉定邸洋館・大正3年・国登録有形文化財）〔写真5〕は、その「和」が，西洋様式の装飾に重ねられた傑作である。

生活デザイナーであった武田は，日本の住宅

左：順正・清水店（大正３年）〔写真５〕
右：同　階段



上：京都大学人文科学研究所附属漢字情報センター
（旧東方文化学院京都研究所・昭和５年）〔写真６〕
下：同　中庭

について，白い壁にスパニッシュ瓦で飾る，アメリカで流行していたスパニッシュの様式が適していることを主張した。弟子の東畑謙三（とうはたけんぞう）とともに設計した京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター（旧東方文化学院京都研究所・昭和５年・国登録有形文化財）〔写真６〕は，そのスパニッシュの集大成だが，藤井斉成会有鄰館（大正15年・京都市登録有形文化財）〔写真７〕などは，そのスパニッシュの様式を基調としながら，中国風なども含め，やはりさまざまなデザインモチーフが加味されていて，武田らしい特徴の意匠となっている。

こうした，デザイン要素の混在，とりわけそこに「和」の要素が目立つような武田の建築意匠の特徴は，いつしか京都の近代建築全体の特徴ともなっていく。昭和初期に，京都市営繕課により，鉄筋コンクリート造に建て替えられた数多くの京都市立小学校の校舎には，他都市には見られない共通したデザインの特徴が見出せるが，それも明らかに武田「趣味」とも言えるものであった。

上：藤井斉成会有鄰館（大正15年）〔写真７〕
下：同　展示室

□藤井厚二

さて，もう一人，京都を代表すると言ってよい建築家を挙げておこう。それは、武田五一が京都帝国大学に招いた建築家・藤井厚二（ふじいこうじ）（1888～1938）である。藤井は住宅の設計に，全く新しいデザイン手法を見出した。

藤井は，武田と同じ広島県福山市の出身で，東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し竹中工務店に勤めていたが，武田に見出され京都帝国大学の助教授となる。その後，京都府大山崎町に土地を買い，そこに第一回から第五回までの実験住宅と称する自邸を次々と建てた。彼は，日本の気候風土の中で理想の住宅がどのようなものか，科学的に明らかにしようとし，『日本の住宅』（岩波書店・昭和３年）という著作も著している。その実験であったわけだ。

しかし，今残された彼の作品には，その科学的な実験の成果ではなく，むしろデザインにおける試みにきわめて独創的なものを感じることができる。藤井は，和洋の生活様式の統合を目指しながらも，同時に日本の伝統的な住宅空間の構成を抽象的な存在として再解釈した。つまり，単純なヴォリュームの組み立てとして住宅を捉えたのである。それは，そのままモダニズム（近代主義）の空間概念に通じている。そのために，今見ても，われわれは藤井の住宅作品に新鮮さを感じるのだ。

現在，実験住宅は，聴竹居（ちょうちくきょ）（昭和２年）〔写真８〕と名づけられた第五回のものだけが残されている。この住宅は，今でも，建築の設計に関わる人々にとって，一度は見ておかなければならない傑作として人気が高い。

藤井は，この聴竹居の成果を持って，京都市内に数多くの住宅を設計し続けた。その集大成とも言える傑作として，京都御苑の西に建てられた中田邸（扇葉荘・昭和12年）があったが，残念ながら，この住宅は残されていない。しかし，汐見邸（昭和７年）など，聴竹居を髣髴（ほうふつ）させる藤井設計の住宅は，いまでもいくつか残されている。

上：聴竹居（昭和２年）〔写真８〕
下：同　居室

□おわりに

このように，近代の京都は，建築家として独創的な仕事をした人物を排出してきた。よく考えると，彼らのその独創性とは，まさに京都が生み出したものとも言えそうだ。松室重光の多彩な様式の理解，武田五一の「和」へのこだわり，藤井の日本住宅への新しいまなざし，いずれも，京都という日本の長い歴史をそのまま堆積したような生活環境があったからこそ，発想されたものだと言えないだろうか。

もちろん，近代建築は，基本的には西洋からやってきたものだ。しかし，それが日本に受容されるためには，さまざまな仕掛けが必要とされた。それをそれぞれの方法で提示したのが,ここで紹介した京都の建築家であったと思う。彼らの試みは,まさに京都発の提起として,じわじわと日本の近代建築に波及していった。

（京都工芸繊維大学教授）

役員の異動

このたび，野村栄太郎副理事長のご退任に伴い，新副理事長に増田正蔵（株式会社京都新聞社会長兼社長）が就任されました。又，京都市会議長，同副議長，団体の代表者の交替などに伴いまして，新役員が下記のとおり選任されました。

新任役員（敬称略・順不同）

副理事長　増田　正蔵（株式会社京都新聞社会長兼社長）
理　　事　巻野　　渡（京都市会議長）
〃　　日置　文章（京都市会副議長）
〃　　新倉　武一（財団法人日本交通公社会長）
評 議 員　梅田　貞夫（社団法人日本建設業団体連合会会長）
〃　　高橋　　温（住友信託銀行株式会社会長）

平成17年度 文化観光資源保護事業助成

祇園祭菊水鉾の後掛

清涼寺本堂来迎壁後障壁画（部分）

今年度の文化観光資源保護事業に対する助成申請の受付を行いました。これまでに四大行事をはじめとする伝統行事芸能の部には，祇園祭の菊水鉾後掛刺繍修理，大文字の山道階段等の整備をはじめ59件の申請がありました。

又，文化観光財の部には，実相院の表門・書院屋根修理工事，清涼寺の本堂来迎壁後障壁画修理など10件の申請がありました。

なお，助成金の交付は当財団文化財専門委員会で対象を審議し決定したのち，理事会において助成額を決定致します。

京の文化財探訪 「廣誠院」の文化財を訪ねてを実施

去る５月27～31日に，新たに京都市の文化財に指定されました「廣誠院」の文化財特別公開を行いました。「京都の文化財を守る会」ボランティアの方々による案内説明のもと，明治期の優れた数寄屋造りの建築と水流が融和する新緑の庭園を，期間中1,968名の方々に鑑賞していただきました。

「京都の文化財を守る会」ボランティアによる解説を聞く見学者たち

三大祭観覧招待事業「祇園祭」を実施

去る７月17日，祇園祭山鉾巡行が行われ，今年は日曜日と重なったこともあり約24万人の人出がありました。当財団の招待席においてご観

覧いただいた方々には，迫力ある鉾の辻回しの様子など楽しんでいただきました。

祇園祭山鉾巡行を楽しまれる会員の皆さん

「織寶苑庭園」 秋の特別公開

東山連峰を借景に，紅葉がひときわ美しい「織寶苑庭園」の秋の特別公開を実施します。

日　時：11月５日（土）～12月４日（日）
但し，月曜日は休み。計26日間
午前10時～午後４時
（受付は，午後３時30分まで）

場　所：織寶苑（京都市左京区白川通二条東）

見学料：600円（中学生以上）

※会員の皆様には，見学料を300円に優待させていただきます。当会報に同封しています優待券をご持参下さい。

紅葉の尼門跡寺院 「霊鑑寺」の文化財を訪ねて

鮮やかに紅葉する庭園を回遊しながら，当寺院の文化財や御所人形などの寺宝をご覧いただきます。

日　時：11月23日（水・祝）～27日（日）
午前10時～午後４時
（受付は，午後３時30分まで）

場　所：京都市左京区鹿ケ谷

参観料：500円

昨年の公開風景

2006年版京の文化財カレンダー 「京都・里の仏たち —守り伝えられる地域の文化遺産」

１・２月に掲載の諸仏

毎年，好評をいただいています当財団のオリジナルカレンダー2006年版は，京都の地域において大切に守り伝えられている仏像を取り上げ発行致します。会員の皆様でご希望の方は，下記要領にてお申し込み下さい。

内　容：

１・２月　木造天部形立像，木造薬師如来坐像，木造僧形坐像，木造如来形立像
３・４月　木造千手観音立像
５・６月　木造十一面観音立像
７・８月　木造地蔵菩薩坐像
９・10月　木造薬師如来坐像
11・12月　木造阿弥陀如来坐像

規　格：Ｂ３サイズ・８枚もの
（表紙・解説を含む）

申込方法：

文化財カレンダー希望，郵便番号，住所，氏名（法人の場合は，法人名と代表者名），会員番号（当会報送付時の宛名ラベルに記載しています），電話番号を記入し，郵送料290円分の切手を同封のうえ封書でお申込下さい。

※なお，特別会員の皆様も上記と同様にお申込下さい。

申込期限：12月１日（木）必着

申 込 先：〒606-8342　京都会館内
（財）京都市文化観光資源保護財団事務局
文化財カレンダー係　宛

（注）
・申込資格は，当財団会員に限ります。
・申込部数は，法人個人ともに１部とさせていただきます。
・カレンダーは，11月下旬より順次発送致します。
・会員以外の方や，会員の方で２部以上をご希望される方は，実費頒布も行ないますので事務局までお申し出下さい。

第36回「京の郷土芸能まつり」 —都の賑わい　祭り　まつり—

京都市域の民俗芸能を舞台で紹介します「京の郷土芸能まつり」。今回は，『囃子』を取り上げ，京都市域の芸能に加えて，特別出演として，京都府と小京都の芸能などもご覧いただく予定にしています。

日　時：２月26日（日）開演14：00

会　場：京都会館第１ホール
（京都市左京区岡崎）

出演の壬生六斎念仏

出演芸能

京都市の芸能：上賀茂やすらい花，壬生六斎念仏，嵯峨大念仏狂言，その他

京都府の芸能：田山花踊（相楽郡南山城）

小京都の芸能：未定

料　金：2,000円（座席指定）

※財団会員の方は，料金を1,500円に割引させていただきます。（但し，お一人２枚まで）ご希望の方は，事務局までお申し出下さい。

三大祭観覧ご招待—「葵祭」—

来年５月15日（月）に行われます葵祭路頭の儀（行列）の当財団観覧招待席（京都御苑）に30名様をご招待します。観覧ご希望の方は，当財団インターネットホームページの会員専用サイト又は，はがきで下記要領にてお申込下さい。

申込資格：会員ご本人に限ります。（一名のみ）

申込方法：会員番号・氏名・郵便番号・住所・電話番号・葵祭観覧希望を明記してお申込み下さい。

当財団インターネットホームページ

URL http://www.kyobunka.or.jp　会員専用サイト

はがき宛先

〒606-8342　　京都会館内

（財）京都市文化観光資源保護財団事務局

三大祭観覧招待係　宛

※お申込は，法人・個人ともに一回のみ

※申込多数の場合は抽選とし，当選者の方のみ，招待券を発送させていただきますのでご了承下さい。

※申込締切日　2006年３月31日（金）必着

※招待券の発送は，５月初旬頃の予定です。

インターネットホームページ

当財団のインターネットホームページでは，京都市域の文化財や観光資源などを紹介し，京都の魅力を順次発信しています。又，会員専用サイトでは，新たに「会員だより」のコーナーを開設し会員皆様方からのお便りを掲載させていただくことにしています。アクセスしてご利用下さい。

URL http://www.kyobunka.or.jp

「会員だより」をお寄せ下さい

会員皆様方の声を大切に，活動を充実させていきたいと考えています。京都の文化財に関することや当財団の活動，事業などへのご意見やご感想，ご提案などお寄せ下さい。又，会員皆様同士の呼びかけや交流などの内容でも結構です。お寄せいただきましたお便りは，内容によりまして当財団のインターネットホームページ会員専用サイト「会員だより」のコーナーで掲載させていただきます。お便りは，会員専用サイト通信フォーム，FAX，はがきでどうぞお気軽にお寄せ下さい。

編集後記

□本号では，特集の２回目として中川　理京都工芸繊維大学教授から，近代に京都を拠点として活躍した３人の代表的な建築家に関するご寄稿をいただきました。紙面の都合により，それぞれの建築細部の写真を掲載出来ないのが残念ですが，これらの建築を眺めてみますと様式やデザインの創造性など建築家たちが提起した様々な試みがうかがえます。

□事務局では，会報の発行とともにインターネットホームページの会員専用サイトの内容充実につとめています。会員皆様方との交流の場にしていきたいと考えています。

会　報　No.90　　2005. 10. 15

会報題字／理事長　上山善紀

会報表紙／京都ハリストス正教会生神女福音聖堂（京都市指定有形文化財）　撮影　神崎順一

編集・発行／財団法人京都市文化観光資源保護財団
京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
URL http：//www.kyobunka.or.jp
〒606-8342　TEL 075（752）0 2 3 5
FAX 075（752）0 2 3 6